
東方和想白魔

鰐姫 水霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方和想白魔

【Nコード】

N6799V

【作者名】

鰐姫 水霧

【あらすじ】

白いしろい、一つの部屋。そこに居た少年は一人でした。人を見たことは、産まれてから三年間しかありません。それから何年間か分かりませんが、ずっと一人なのでした。ある日、少年の目に一人の少女が映りました。或いは映ったと思い込んだだけだったかもしれませんが、穢れの無い綺麗な少女でした。．．．．．いつからか、少年の目には少女しか映らなくなりました。少女はいつでも笑っていました。少女は最後に初めて、少年に話し掛けました。「連れていってあげる．．．．．あなたの望む場所へ」少年

は答えました。「君と同じ場所へ」

00：白き夜に悪魔は目覚める（前書き）

どうも鰐姫水霧こはね すいむです。

拙文ですが、暇潰しにでも読んで頂ければ幸いです。

00：白き夜に悪魔は目覚める

ここは何処だ？

何も見えない

自身の息の音は、辛うじて聞こえる

それも直に聞こえなくなった

感じるものは何も無い

身体は確かに在る

記憶と呼べるものは無い

だが知識は在る

．．．．．頭が痛い

目蓋越しの視界が白がかって来た

どうやら僕は眠っていたらしい

目蓋を開いた先に広がる世界を想像してみる

光に満ちた楽園か

闇に堕ちた落園か

それとも闇光入り雑じった混沌か

意味の無い想像だ

だが、この目の蓋を開くのはまだ早い

と言うより、まだこうしていたい

世界を見るのが、今は未だ恐ろしい

記憶が無いのだ

しかもそれを自覚している

知らぬ世界に身を投じられる程、僕の心は強く無い

願わくは永遠に眠りの中、想像とも妄想ともつかぬ世界に沈みたい

光が強くなり、僕の頭を撫でた

どうやら限界らしい

少しずつ、目蓋を開いてゆく

あの光は月のものだった様だ

和やわらかな紅い月光

そんな光に見守られながら、僕は目覚めた

00：白き夜に悪魔は目覚める（後書き）

感想等よろしくお願いいたします。

更新ペースは出来るだけ安定させるつもりですが、大きく乱れてしまったら申し訳ありません。

01：黒き刃は白を語る（前書き）

どうも水霧です。

最近広島島の加計という町に自然を感じに行っていました（笑）
駄文←を投下したので暇つぶしにでも。

01：黒き刃は白を語る

よく見れば、月は白かった。

ただ、一人の少女が、血を幾重にも塗りたくった様な紅黒い色の傘を、僕の上に差していた。天気雨だったのだ。

その少女は、泣いていた。

どれだけ泣いていたのかは分からない。一日前からか、一年前からか、或いはそれより前からか……

雨は止みそうになく、少女も泣き止みそうに無い。

座り込み下を向いたまま、渴れ果てた涙の代わりに、赤より紅い血の涙を、ただ流し続けている。

雨で薄まった血液で水溜まりが出来ていて、その中心に僕は眠っていた。

僕が眠り始めた時から、彼女は泣いていたのかも知れない。

僕は上半身を起こし、少女に尋ねた。

「何で、泣いているの？」

黒いドレスの少女は、目を見開いた。

起きた僕を一度見て、目を擦り、黒い瞳をもう一度僕に向けた。

「レフィルカ様．．．．．！？」

どうやら、僕は『レフィルカ』と言う名前らしい。

高い声、白い長髪、純白のゴシッククロリータ。よく考えなくても女なので、僕と言う一人称は変えた方が良くも知れない。

「僕、いや私は、いつから眠ってた？ それと私の名前、あと種族は？」

兎に角取り敢えず、最初にこの質問をしておかないといけない。

何よりも自分が何者かを把握する事が最優先だ。少なくとも人間では無い事は分かっている。何故ならこめかみの上辺りから細長く硬く鋭い一对の突起体．．．．．おそらく角、背中から蝙蝠のそれに酷似した白い翼、腰辺りから先端部分が槍の形をした細長く白い二本の尻尾が生えているのだ。この時点で僕の『常識』とは大きくかけ離れている。

僕の中にある『知識』の中から考えてみたが、鬼には翼や尻尾は無く、悪魔には角は無い。この二つの融合した『何か』かも知れない。

「あなたはレフィルカ・アマキール。一万年は眠っていました。種族は悪魔ですが．．．．．その角はある鬼の物です」

少女は目元の血を拭い、僕が弄っていた角を見て言った。

一万年なんて気が遠くなるような年月を眠っていたのか。信じられる話では無いが、彼女が嘘を吐いているようには見えないので事実なのだろう。

それにある鬼．．．．．か。訳有りな感じだが、角に違和感は感じられない。むしろ違和感が無い方がおかしい筈なのだが。角だけでは無く、翼や尻尾もだ。

そして、レフィルカ・アマキール．．．．．何か大きな意味がある気がする。自分の名前なので、意味があるのなら知っておきたい。

「じゃあ一つ目の質問。その鬼はどんな人だった？」

「本当に、忘れてしまったんですね．．．．．」

「？」

「．．．．．いえ、何でもありません」

忘れてしまった、という事は、一万年前に何かがあったのだろう。これは聞かなくて良い。僕は悪魔でも僕であり、過去を押し付けられても鬱陶しいしどうしようも無いのだ。解決できない事まで聞く必要は無い。それが過去の事なら尚更だ。

「彼女の名は、討霸伐那^{うつは きりな}。二本の長槍を操る鬼で、レフィルカ様の親友でした」

「．．．．．伐那の角が僕にある理由を教えて」

「．．．．．彼女は、死にかけていたレフィルカ様を生かす為に、レフィルカ様と『同じ存在』になりました。ちなみに尻尾もそれに影響された形状です。既に完全に『調和』しているので、彼女の意識はもう存在しません」

同じ存在になった？ 僕が死にかけていて、それを生かす為に？
．．．．．分からない事が多すぎる。特に『調和』という部分は何となくのイメージすら掴めない。力か何かを僕に全て渡したという事は何となく分かる。

「『調和』している って、どういう事？ 『同じ存在』になるっていうのも」

「『調和と混沌を操る程度の能力』．．．．．レフィルカ・アマキールと言う存在の根源の力です。この『調和』を彼女が強制的に発動させ、既に生死の確認もとれなかったレフィルカ様に腹部に孔を穿たれる重傷を負っていた彼女自身を取り込ませ、同化させ、最終的にレフィルカ様自身に『調和』したのです。意識すれば、この能力の存在が分かる筈です」

「僕に、調和した．．．．．」

ならば意識は半分ずつになると思うのだが、違うらしい。釈然としないが事実は事実、今は深く追及しない事にする。

胸に手をあて、目を閉じてみると、確かに僕の中にあつた。『調和と混沌を操る程度の能力』。そして……………

「あつたけど、もう一つの……………『瞬を操る程度の能力』？」

「やはり在りましたか……………伐那の能力です。自身の速度、特に瞬発力を飛躍的に上昇させる事が出来ます。この能力で伐那は『瞬鬼』と呼ばれていたので、それだけ強力な能力です」

速度を操る……………強い上に何にでも使えそうな能力だ。僕自身の能力なんて使いどころが分からなければ訳も分からない。ていうか戦うこと前提の『強力』は、嫌な予感しかない。

「……………二つ目の質問。戦いは頻繁にあるの？」

「妖怪と、特に鬼と出会った場合はほぼ間違いなく戦いになります。しかしレフィル様程の力なら、基本的に脅威にはならないでしょう。……………悪魔で『基本的に』、ですが」

「つまりは殺される可能性もある、と」

「そういう事になりますね」

少女は真顔で答えた。一万年もの時間泣いていたというのに既にその名残は無く、血の涙でぐしゃぐしゃになっていた顔も今は綺麗になっている。その顔で言われたので文句も言えなかった。
「……………三つ目の質問に移ろう。」

「三つ目。あなたは何者？」

「私は魔剣ティルヴィングの付喪神、名前はありません」

「ティルヴィング……………!？」

畳んでいた彼女の傘が、漆黒の剣へと姿を変えた。

「……………僕は、神話などについてあまり詳しくは知らない。それでもティルヴィングなんていう最も有名で強力な魔剣ぐらいは知っている。」

「はい。そしてあなたは『元』私の所有者でした」

「元？」

「……………レフィル様が永い眠りにつく事になったあの日、あなたは最後に『誰も死なぬように』と私に願いました。私は願いを叶える事の出来る魔剣なのでその願いを叶えることは出来ました。が、同じく重傷だった私を含め三人、つまり三つの願いを叶えてしまったのです」

漆黒の刃を白い指でなぞりながら、彼女は言った。

三つの願いを『叶えてしまった』。

．．．．．嫌な予感がする。確かティルヴィングは、三つの願いを叶えた時に何かが起こる魔剣だった筈だ。

「それで、三つの願いを叶えたら．．．．．？」

僕は固唾を飲み込んで、彼女．．．．．ティルヴィングに尋ねた。最悪の答が返ってくることは、何となく予想できていた。

「レフィルカ様、私と戦って下さい。

私は願いを三つ叶える代わりに所有者の命を摘む魔剣、ティルヴィング。

伐那の力を得たレフィルカ様でも、本気で来ないと．．．．．死にますよ」

ティルヴィングが言い終わると同時に、死の刃は僕に向けられた

01：黒き刃は白を語る（後書き）

次話はレフィルカとティルヴィングの戦いです。

一話ごとの文章量はもう少し多い方が良いでしょう？
それも含め感想等よろしくお願いします。

02：黒き刃は白を刈る（前書き）

どうも鰐姫です。

サブタレイニアンローズが避けられません。
こいしかわいいよこいし。そして怖いよ。

02：黒き刃は白を刈る

ティルヴィングが此方に切っ先を向ける。
僕は瞬の能力を使い横に飛ぶ。

次の瞬間、避ける前に僕が居た場所の地面は砕け散った。

「・・・・・・・・っ!!」

「この程度、序の口ですよ」

凶刃が横に振られる。

能力を発動したまま翼で上に飛翔して避ける。
綺麗な扇形に地面が削られ、近くの木々も砕け散った。

「ズルいでしょその威力・・・・・・・・」

「レフィルカ様も速すぎです。でもここからは話す余裕も無くなります。せめて能力は解かない事を奨めますよ」

言われなくても解くつもりなど無い。

テイルヴィングの攻撃は威力が高過ぎる上に速度もある。

『瞬を操る程度の能力』で避けられているが、もろに当たれば悪魔
と言えども致命傷を負うだろう。

飛び込み斬りを大きく横に飛んで躲す。

直接当たらなくても掠り傷が付く程の威力だ。ここは攻勢に転じた
い。

自分の武器に成るものを考えていく。

角、却下。リーチが短過ぎる。

翼、却下。明らかに攻撃用では無い。

爪、採用。鋭く長く伸びた左右の黒い爪を擦り合わせた。強度も充
分だ。

尻尾、言うまでもなく採用。先端が鋭い槍になっている上に、自分
の手足の様に自由自在に動かせる。伸縮可能であり、最長では少な
くとも十メートルある。

魔法と思われる黒い炎をしゃがんで躲し、左の尻尾で反撃する。

これは反応して弾かれたが、右の尻尾で頬を掠める事に成功した。

「っ！？」

「じつちだよ」

ティルヴィングの前に接近、一瞬の間を置いて背後へ移動する。彼方も反応してくるので更に頭上へ飛ぶ。右手の爪に『力』を込めて全力で振り下ろした。

ギャリイン、と高い金属音が鳴り、親指以外の爪が中間辺りで折れた。

「痛っ．．．．． やっぱ強いね、ティルヴィング」

吹き飛んだ彼女に向かって話し掛ける。

あれは耐えられなかったのでは無く、威力を殺す為だろう。その証拠に、彼女には頬に軽い傷しか付いていない。

「貴女様こそ、この一瞬でここまで戦いの感覚を．．．．．」

「まだ本気じゃ無い君に言われたくないね」

「．．．．．そこまで見抜きますか」

「本気だつたら左の尻尾が無くなってるよ」

折れた爪に『力』を注いで再生させた。俗に言う魔力という奴だ。能力と同じく僕の中に感じられている力で、おそらく魔法も使える。

そしてもう一つ、妖力と言う力も感じる事が出来る。

先程の攻撃はこの妖力で爪自身を強化し、魔力を纏わせた物だ。

二つに大きな違いは見られないが、魔力が紅色で妖力が蒼色である。しかしティルヴィングの魔力は黒いので、個人で違う可能性もある。

「……………どうやら私は、大きな勘違いをしていたようです」

「？」

「記憶を失った程度で、貴女に手加減など必要無いですね」

「ちよっ……………いやいやいや、反則でしょ……………っ
！！」

黒の長剣が、更に強く大きな魔力を纏う。

『漆黑』と言う言葉でも言い表せない『死』が、僕の前に顕現した。

「反則？ まだ『貴女自身の』能力も使っていないのに？」

そして彼女は狂刃を右手から左手に持ち換え、その場で振るった。

「
ディサイドブラック」

瞬間、綺麗な弧の形をした強大な黒が、僕の視界を覆った

僕は今、最高速度で黒い衝撃波を避け続けている。

左足首から先は無惨にも消え失せており、血は止まらない。

「つつ．．．．．!!」

テイルヴィングは言葉を発する事無く、攻撃を続けてくる。

魔力で止血し、更に形だけは元に戻した。

馴れるまではまともに動きそうに無いので、使わない事にする。

それより、あれを止める方法を考えないとまずい。

剣を振っただけで必殺とも言える魔力の衝撃波を撃ってくる。

右翼の先端が消滅した。

痛みはほぼ無い。翼などの痛覚は最低限しか無いらしい。

僅かな魔力で完全に再生したので、盾としても使えそうだ。

「考え事ですか？ 随分余裕ですね」

「そう見えるっ・・・・・・・・の?」

速度の高い衝撃波を大きく避ける。

やはり吹き飛ばされそうになるが耐えて、次の物を避ける。

下に飛び左に跳び上に飛び前に飛び・・・・・・・・

埒が明かない。

駄目元で魔力を右手の人差し指の先に集め、光線をイメージして放った。

すると太さ約1メートルの紅い光線が発射された。

黒い衝撃波に掻き消されたが、あちらも威力が弱まっている。

「そう見えますね」

「ああそうかい」

妖力と魔力で全身を強化し、速度と瞬発力を最大にする。

一瞬でテイルヴィングの背後に回り込み、飛び蹴りを背中にあてた。

後ろ向きに衝撃波を放って来たが翼を身代わりにして躲す。

再生すると同時に妖力を左手、魔力を右手に集める。

右腕を左手で掴んだ状態で突き出し、二つの力による光線を放った。

．．．．．しかし妖力と魔力が拒み合い暴発、右腕が消し飛んだ。

「うああッ！！」

こんじきくろおり
「恨喰黒檻」

黒い柱状の魔力が均等に大量に並び、四方を覆う。
更に上下には蓋がされ、右腕を再生していた僕を完全に捉えた。
全ての辺が約二メートルの立方体、側面は網状だ。

「．．．．．っ」

「．．．．．終わりですね。」

この「恨喰黒檻」は、私が柱の間に剣を刺すと、全ての柱間から同じ物が出現します。ティルヴィングの刀身は89cm、つまり深く突き刺せば終わりです」

それで網状だったのか。

．．．．．まずい。このままでは本当に殺される。

檻を破壊しようとしても傷すら付かない。

穴から光線を撃つが難なく弾かれる。

尻尾で攻撃しても同じく弾かれる。

外に魔力を集めようとするが檻の魔力が妨害する。

黒い刃が檻の網目を通り抜け、少しずつ近付いてくる。

万事休す．．．．．いや！！

最後に『調和と混沌を操る程度の能力』、これに賭けるしか無いだろう。

何となくだが使い方を思い出した。

そして、伐那とティルヴィングと過ごした、大切な記憶も．．．．．

檻の魔力を空気と『調和』させた。

すると魔力は形を保てなくなり、霧散した。

「な．．．．．!？」

「．．．．．こんな戦い、終わりにしよう」

右腕に妖力と魔力を集めて調和させ、暴走を抑えた。

更に射出すると同時に、調和した二つを『混沌』させる．．．．

・

混沌と化した妖力と魔力は激しく反発し合い、壊滅的な破壊力を産む

「レイ・ヴァイオレット」

巨大な紫色の光線が、
空気の張り裂ける様な轟音と共に放たれた

02：黒き刃は白を刈る（後書き）

・調和

あらゆるものが自他を傷付ける事無く存在する状態

・混沌

存在や非存在に関わらず何も交わる事の無い状態

大体こんな感じですね。 混じる混ざらないで考えてほぼ大丈夫です。

レフィルカのイラストを投稿する可能性もあったり無かったり

03：遠い過去の記憶 - サナトリウム - (前書き)

どうもお久し振りです。 鰐姫水霧です。

更新が遅くなったのは殆どオリジナル小説の方を書いていた為です。
リフレクトファンタズムと言うタイトルです。

「おいこつち書けよ」と友人に言われました。
そう思った方は下の一言からどうぞ。

03：遠い過去の記憶 - サナトリウム -

「おい、生きてる？」

「貴女が加減したお陰で、掠り傷だけですよ」

ティルヴィングを傘に戻し、此方に歩いてくる白い悪魔に言った。

「良かった。何とか上手く加減できたよ」

「全く．．．．． 本当に記憶は無いんですか？」

あの能力は、記憶を失って使い方も分からない状態で扱える様な代物では無い。レフィルカ様と伐那と私で協力し、五百年間以上練習し続けてやっと扱える様になったのだ。

一部でも記憶を取り戻したに違いない。

あの記憶の無い者に、あの努力を知らぬ者に使えてたまるか！！

「思い出したよティルヴィング．．．．．いや、ルヴィ」

「！！・・・レフィ様」

ルヴィ・・・一万年前の、私の呼び名だ

良かった・・・思い出してくれた・・・

大粒の、この一万年に流した物とは違う涙が溢れて来る。

「おっとー！！」

「・・・レフィ様・・・」

今だけは、レフィ様の胸で泣かせてもらっていいだろう。

僕は、人間だった。

．．．．．遠い昔の事だ。

伐那とルヴィと出会った時には、既に僕は妖魔になっていた。

白くて薄暗い部屋に、僕は居た。

食べ物があった。ベッドもあった。本もあった。テレビも、ゲーム機も、パソコンも、ピアノも、何でもあそこにはあった。

決まった時間には広い庭で遊ぶこともできた。

小さかったが、暑いときにはプールで泳ぐこともできた。

ただ、僕は、一人だった。

三歳の頃だっただろうか．．．．．僕は両親に連れられて、白い部屋と逢った。

この時、既に僕は一人になっていたのだろう。

その時の両親の表情は、薄黒い靄が掛かっ
ていて思い出せない。
多分．．．．．多分、笑っていた。微笑んでいた。幸せそ
うに．．．．．。

想うことは、何も無かった。

ある日、僕は一人では無くなった。

目を閉じればいつでも、一人の少女がこちらを見て笑っていた。
穢れというものを知らない、どこまでも純粋な笑顔だった。

僕は目を奪われた。

眠る様に目を閉ざして、いつも彼女の事を見ていた。
そしてそのまま眠りに就いて、彼女の夢をみていた。

少女はいつでも、笑っていた。

言葉を発する事は、最後に一回しか無かった。

「連れて行ってあげる……………あなたの望む場所へ」

僕は、迷う事は無かった。

ただ一つだけ叶うなら、何処へでも行こうと思ったのだった――
|。

「君と同じ場所へ」

この身体は彼女の物だ．．．．．

今の僕に、怖れる物は無かった。

彼女と一緒にになり、仲間まで出来たのだ。

何不自由なく過ごせる部屋だったが、今の僕には仲間が居る。

伐那は僕の中で生きている。

あの時よりも強く僕に渴を入れてくれる、僕の存在の一部だ。

籠の中の鳥が、大空へと羽ばたく様な気分だった。

僕の胸の中で泣いていたルヴィも泣き止み、笑顔で僕に言った。

「宛てはありませんが、行きましょう!!」

僕はとびきりの笑顔で頷いた

03：遠い過去の記憶　・サナトリウム・（後書き）

あえて短めです。文章量を増やせなくて誤魔化した訳では無いです。
感想等よろしくお願いします。

ああ妖夢だとグセフラッシュ避けられない！！

04：古き知識と異なる進化（前書き）

どうも鰐姫水霧です。こんばんわ。

04：古き知識と異なる進化

「・・・・・・・・何これ？」

「分かりません」

ルヴィはキツパリと答えた。

一万年間眠っていた深い竹林を抜け、約一時間歩いた所だった。
天を貫くビル群・・・・・・・・摩天楼が、不自然なほどに一部分に出
来ていたのだ。

確か、僕が今居るのは、白い部屋に居たときよりも過去の世界であ
る。

ぼくがねむりにつく

一万年前には人間らしい人間すら居なかった。

本で得た知識からして、少なくとも十万年は昔だった。

．．．．．明らかに早過ぎる。あり得るはずがない。

「ちょっと、行ってみようか？」

「そうですね．．．．．レフィ様なら何か分かるかも知れませんが」

僕達、妖魔と魔剣は、おそらく人間が住んでいる街へと歩いて行っ
た。

．．．．．僕はすぐに、自身のこの一言を思い出すことにな
った

「妖怪！？ 妖怪だ、撃ち殺せ！！」

「くっ……………」

「え、ちよっ……………」

『僕達、妖魔と魔剣』…………… 何で気付かなかったんだ僕の馬鹿。

ルヴィは兎も角、角と翼と尻尾付きの僕は人外丸出しである。

…………… それにしても、妖怪は一般的に実在すると認識している様だ。

一人でやたらテンション上げてるこのおっさんのみが例外だとは考えにくい。

もしかしたら、僕は過去では無く異世界にやってきたのかも知れない。

まあ彼女と一緒にだから割とどうでも良いのだが。

「しかし…………… まさかのレーザー銃」

「光速でも、手の動きを見れば簡単に避けられますがね」

その通り、身体能力は所詮人間なのだ。

それに『瞬を操る程度の能力』は、瞬間最高速度では光速並みである。

．．．．．光速並みと言うのは多少盛ったが、手の動きを視て避けるのは容易い。

ちなみに、光速の物体は物理的に無限のエネルギーを持つ、と言うのは嘘だ。

実際はニュートリノの方が速い上、これには僅かだが質量がある。

魔力と調和能力で全身をコーティングすればソニックブームも出ない。

基本的に『調和と混沌を操る程度の能力』は万能である。

「悪いね、少し眠ってて」

混沌能力を付加した魔力を僅かに右手に纏い、人間の首筋に触れた。こつすることで意識を沈めることが出来る。強い相手には効かない

けど。

「……………さてどうします？ レフィ様の姿だと襲われますけど？」

「こんな時の調和能力だよ」

角、翼、尻尾を空気と調和させると、ただの人間の姿になった。ただこれらは存在が強過ぎたのか、少し能力を緩めると角は髪留めに、翼はブレスレットに、尻尾はアンクレットになった。結構お洒落で良いかも知れない。

角の名残のある二つの髪留めでツインテールにし、ルヴィに言った。

「すごく良くない？」

「可愛い……………ですけど、違う意味で襲われるかもしれない……………」

「どっいつ意味で？」等とふざけて言いながら、街の入り口の門をくぐった

「凄い……………」

「何ですかこれ……………」

一言で表すなら、未来都市。

そして最も驚いたのは、建物などが全て平安風の造りである事だ。
木造建築の様でありながら基本的には自動ドアである。走っている
のは自走する牛車、空には半透明の巨大な3Dモニター、そして街
の中心部分に集中して聳え立つ超高層ビル群……………

訳が分からない。

約一時間前の僕と同じ様な台詞を無意識に零すルヴィ。
21世紀を知らない彼女は、僕以上の衝撃を受けた事だろう。

「……………取り敢えず、少し歩いてみよう」

「そう……………ですね。きっと何かの間違いですよね」

そう信じたものだ。しかし見る限り幻術の類では無い。
調和能力はあらゆる妖術や魔術、その中でも特に幻術を無効化でき
る。

軽く使用しても効果が無いと言うことは、つまりはそう言うこと
である。

で、少し歩いていると、屋台のおじさんに声を掛けられた。

「お嬢さん、お姉さん、お好み焼き食ってかないかい？」

十中八九、お嬢さんが僕でお姉さんがルヴィの事だろう。
文句は無いがやはりルヴィの様な……………その……………ない
すばでいには憧れる。

「……………美味しそうですね」

「すみません……………今ちよつとお金無くて……………」

「あちゃあー……………そいつはしょーがねえなあ」

お金、欲しい。こう思ったのは初めてだ。

「お金？」と首を傾げるルヴィに「それで交換するんだよ」と説明した。

ルヴィは頭が良い為、一言で大まかには理解してくれた。

「……………おじさんお願い、一切れだけ下さい!!」

「おいおい、こんな可愛いお嬢さんをお願いされちゃあ断れねえだろっ!!」

おお……………一切れどころか丸々二つ無料^{タダ}でくれた。

「あの、良いんですか?」

「おまけだよ、遠慮せずに食いなつて!」

……………気の良い人だ。

僕が「ありがとう!」と言うとルヴィも「ありがとうございます」と言った。

屋台の隣にあったテーブルに移動し、一つをルヴィに渡す。

「・・・・・・・・初めて見るものばかりです」

「それは僕も同じだよ。・・・・・・・・見るのはね」

一応小声で付け足した。

ビルや屋台やテーブルなどは本で知っている。ただ、見るのは初めてだ・・・・・・・・

この一言はルヴィに聞こえなかった様で、割り箸の使い方を聞いてきた。

「あ・・・・・・・・これでどうしろと？」

「これはね・・・・・・・・こうして割って、こう持って・・・・・・・・」

この時間は、何でもない日常の一部の様だった。

04：古き知識と異なる進化（後書き）

感想等よろしくお願いします。

05：不思議な街と一人の少女（前書き）

どうも鰐姫水霧です。

やっと原作キャラです。今とは少し違いますが。

05：不思議な街と一人の少女

「もぐもぐ．．．．．美味しかった」

「ぱくぱく．．．．．美味しかったですね」

そして、食べ終えたら一言。

「『ご馳走様でした!』」

最低限のマナーは、一万年程前に教えてあるのだ。

ゴミ箱に割り箸とケースを捨て、ルヴィに話しかける。
少し前から気になっていた事である。

「記憶、取り戻したんだけど．．．．．」

「？　．．．．．まだ何か、無い物があるのですか？」

無い．．．．．か。合っているような、少し違うような．．．．．

「所々、抜けてるんだよ。そのページだけ破り取られたみたいに．．．．．」

「レフィ様ですか．．．．．実は、私も同じなんです」

「やっぱり」

「予想していたんですね、貴女様も」

おそらくこの一万年間、もしくは一万年前に何かがあったのだろう。今ある限りの情報と記憶から考えると後者の可能性が濃厚である。僕とルヴィと伐那は何者か、或いは『何か』に殺されかけていたのだから．．．．．

「ルヴィは、あのとき僕達が死に掛けていた原因を憶えてる？」

「．．．．．私も、その部分の記憶は残っていないのです．．．．．」

予想通り、記憶から抜けている箇所はおおよそ同じのようだ。

僕は意識が無かった為、伐那の存在が僕に調和した事自体憶えていない．．．．．

調和と混沌．．．．． 十人に聞けば十人が、恐ろしいのは混沌だと答えるだろう。しかし僕は、この場合は、調和の方が怖ろしいと答える。

僕と伐那の例を見れば誰にでも理解出来る筈だ。二つの存在を完全なる一つの存在に変えてしまうのが『調和』で、そこに『混沌』の介入する余地は無い。

．．．．．一つになった僕と伐那は、もう二度と元には戻れない。

尤も、不可能なそれを可能にするのが『混沌^{カオス}』なのだが．．．．．
．．．伐那にもう一度逢いたいと言う感情を、僕には完全に押し殺す事は出来ないが、きっと伐那は最期の覚悟を決めて僕の命を救ってくれたのだ。

伐那の誇りの為に、僕は伐那を救ったりしない。

僕の身勝手な救いなどでは、本当の意味で伐那を救うことは出来ない。

「．．．．．僕は生きるよ。きっとそれが『僕達三人』の生き残った理由だから」

「お供しますよ．．．．．たとえ世界が終わっても．．．．．」

過去世界か異世界か、そんな事はどうでも良かった。

生きることが何より大切だという事に、今更気付いた気がする。

『彼女』に貰ったこの命に、感謝を込めて．．．．．

「八意．．．．．はちい？」

「名字のようですが．．．．．やい？」

「『やごころ』よ．．．．．まあ確かに読みにくいけど」

何やら立派なお屋敷の前で、どうでもいい事を話す白と黒。

白というのは僕であり黒というのはルヴィの事だとは言つまでも無い。

そしてこの異様な二人に話しかけてきたのは、銀髪の少女であった。見た目は12歳程度で、注意深く僕達を見ているが警戒している気配は無い。

ここが本当に異世界なら、ここらで友人を作っておくのも良いかもしれない。

「これでやごころって読むんだ．．．．．」

「やはり漢字って難しいです．．．．．ところで貴女は？」

「八意永琳、この娘よ」

八意永琳．．．．．これは本名では無い。

名前には力が宿る。今の名前からはそれが全く感じられなかった。

我が能力はその特殊さ故、相手の言葉に含まれる僅かな違和感で嘘を見抜く。

．．．．．というのは嘘で、見抜ける嘘は名称に関するもののみである。

目には目を、歯には歯を、嘘には嘘を、である。

「あまき　るか雨樹流華。ゴスロリとかが趣味だよ」

「あすか　てんい飛鳥天射。同じく趣味はゴスロリ等です」

瞬時に対応し、更に偽名まで考えられるルヴィは凄いと思う。

．．．．．ティルヴィング・スカーだから、スカーを弄つて飛鳥か。

天射は．．．．．テモンモイも名前に入っている。流石ルヴィ。凄い。

ちなみに僕の場合はアマキールから雨樹、レフィルカから流華である。

「…………立ち話もなんだし、上がっていく?」

「良いの?」

「そうです、悪いですし……………」

「良いわよ良いわよ、あなた達面白そうだし、悪い人では無さそうだし」

「じゃあお言葉に甘えて」

「では私も」

僕達は言われるがまま、八意邸へと入っていった。

この少女…………永琳が、僕達に興味を持ったのと同じく、僕もまた永琳という一人の謎の少女に興味を持ったのだった。

掘り炬燵に座布団は勿論、敷地内の全てが和風の八意邸。
しかし扉が自動になっている事を始め、機能性に関しては『二十一
世紀の世界における現代社会』のそれを遥かに上回っている。

「……………何て破茶目茶な世界にやって来てしまったのだろ
う。」

これでは本格的に常識が通用しない可能性もあるじゃないか。

「……………さて、単刀直入に聞いわ」

「うん？」

「何でしょう？」

切り出した少女……………永琳に何を言われるか、何となく予
想は出来ている。

「面白そう」と言ったときの表情から伺えた、並々ならぬ知的好奇心……………」

あれはとても、唯の人間に対して向けられる事の有り得ないものだった。

「あなた達、普通の人間じゃ無いわね？ 二人とも途轍もない力の持ち主。

……………仙人が何かかしら！」

ほれ来た、やはりそうであった。

……………妖魔と魔剣と言って襲われたくないのでそういうことにしておく。

「……………調和と混沌の仙人、レフィルカ・アマキール。ちなみに軽く一万歳」

「破滅へ導く仙人、ティルヴィング・スカ！。同じく一万歳以上です」

「……………はつきり言って予想以上よ。規格外じゃない」

規格外……………

僕は意外にも、規格外と言える程の力は持っていない。

『調和と混沌を操る程度の能力』は巫山戯た能力だが、本来戦闘向きでは無い。『瞬を操る程度の能力』は瞬発力その他を上昇させるだけの能力である。

ルヴィは僕以上の超強大な魔力を持つが、それだけだ。

『破滅へ導く程度の能力』は、つい最近破った上に規格外とは言いづらい。

「規格外になんて、僕達にはなれないよ」

「その通りです。それこそ程遠い……………」

「……………まあ、良いわ。あなた達二人が仙人だっという事は伏せておく？」

「そうだね、騒がれても困るし」

「お願いします」

八意永琳…………… 本名は何なのだろう？

ルヴィが気付いていないあたり、相当この名に慣れているようだが・

それより、僕達の正体は名前で勘付かれる事がありえるかもしれない。

Refiluca Amachier Refiluc
aからaを取って並び替えれば分かる筈だ。

. そう、Lucifer Chimera（ルシフェ
ル・キマイラ）である。

悪魔にして混合生物、つまり悪魔でありながら鬼でもある僕そのもの
の事だ。

尤も、僕は人間でもある。

人と悪魔の二人が『一つの存在』になつて誕生したのが僕という存
在であり、鬼である伐那と悪魔分の多い半人半魔の僕が一つの存在
になったのが一万年 本格的に『混合生物』になつた
のはあの時だろう

「 頭の中で話が跳躍するのは悪い癖かな」

「 ? 」

「流華、どうかした?」

「あ、何でもないよ。あともう流華じゃ無くてレフィル力で良いよ」

「私も天射では無くティルヴィングで大丈夫です」

「・・・・・・・・・・じゃあお言葉に甘えて、本名で呼ばせてもらうわ」

ふむ・・・・・・・・・・今までの様子からして、永琳は俗に言う『天才』なのだろう。

まだ12歳ぐらいなのに、話術はまるで賢者の如く巧みである。

・・・・・・・・・・だが所詮は子供。僕の仕掛けた簡単な罠に掛かる・・・・・・・・

「君が本名で僕達を呼ぶなら、僕達も君の本名を知らないと不平等だよな？」

罠には餌が必須だ。この場合は本名という餌である。

最初から「普通の人間じゃ無い」と気付いていた事は分かっていたので、態と最初に偽名を教え、それから本名を教えた。等価交換に持ち込んだのである。

．．．．．まあ、最初から永琳が偽名だと気付かなければ不可能な方法だ。

「．．．．．あなた、やっぱりただ者じゃ無いわね」

「流石です．．．．．で、レフィ様の言う貴女の本名は？」

永琳は「仕方無いわ」と呟き、ゆっくりとした重い口調で言った。

「
× × ×
よ
」

それは、地上に存在する言葉で発音できる様な名前では無かった

05：不思議な街と一人の少女（後書き）

感想等よろしくお願いします。

06：月へ去りし文明（前書き）

どうも鰐姫水霧です。

今回は説明文多めです。特に最初の方。

06：月へ去りし文明

時は流れ、別れの時がやって来た。

この世界の人間は長い間、不老不死についての研究を進めていた。薬師の一族である八意家の歴史の中でも飛び抜けた天才だと言われる永琳の能力は『あらゆる薬を作る程度の能力』である。その為、研究機関からは「彼女なら不老不死の薬も作成出来る」と大いに期待されていた。

しかし天才である永琳でも、原料が無ければ薬など作れない。理論上は作成可能でも、現実問題としては不老不死の薬の原材料になる物などこの世には存在しない。つまり、不老不死など机上の空論でしか無いのだ。

しかし人類は、僅かな可能性を『月』に見いだした。

研究の結果、地上には『穢れ』というものが円満しており、それが地上のあらゆる生命体に寿命を齎している事が証明されたのだ。永琳の妹である八意永夜やじよる えいやにより発表されたこの研究結果は、逆説的に「『穢れ』が無い場所なら『不老』にはなれる」という一つの答を導き出した。

それと同時にあらゆる惑星の研究が進められ、たった一つだけ、人間の生活できる星が発見された。それが月である。何でも、『裏の月』なる場所には海も木もあり、地上と変わらぬ量の酸素までもが

存在しているらしい。

その裏の月へ辿り着く方法が明らかになった為、移住を行う事になった。

無論、移住が嫌な人間は地上に残ることになっている。当然数は少ないが、僕とルヴィ、そして永夜も残るらしい。「私は普通に生きたい」と言う事だ。

僕とルヴィは人類全体からも仙人だと認識されるようになってしまったし（僕が羽だけ目撃され仕方無く羽付きの仙人だと誤魔化した）、人助けを行っていたからか、最早信仰される存在になってしまっている。それでも月に行かないのは地上に残る人間達の事を見守る為、そして本当にここが異世界なのか確かめる為である。研究者や地位のある人間は全員月に移住するのだ。いくら永夜が残ろうと、秀才一人では文明が廃れて消滅するのも時間の問題だと僕は考えている。

永夜は友達だし、当然、全力で出来る限りのサポートはする。それでも流れる時間には勝てないだろう。この超高度かつ超小規模な文明は、永琳を始めとする幾人もの賢人達が協力しなければ成り立たない。

襲撃してくる妖怪や悪魔は僕とルヴィで撃退出来る上、永夜もそんなにそこらの妖怪よりよっぽど強い。科学に頼っているのは本でも見たことの無いような、永夜の霊力を弾丸にするスナイパーライフのみであり（霊力：人間の持つ、魔力や妖力と似た力）、その他は自身の実力のみで妖怪とタメを張れるのが八意永夜である。能力は薬師一族とは思えぬ『空間を操る程度の能力』。少しだけなら時間までをも操る事の出来る、人間とは思えぬほど強力な能力を所有している。

それでも僕の予想では、この文明は人類史の始源まで後退する。永夜はあくまで人間であり、寿命は必ず訪れる。『空間を操る程度

の能力』で寿命を引き伸ばしたとしても、人間である限りは必ず限界があるのだ。子孫を遺すにしても、永夜程に強く、賢く、そして人間全体を纏められる人間は産まれて来ないだろう。残るのは僕達を含めて僅か五名。何がどうなるうと、文明はここから急激に廃れていくのだ。

無論、永夜はそれが理解出来ないほど愚かでは無い。あと二人の若い兄妹も、その事を十分に理解して地上に残ったという様子だ。地上に残るという事は、彼らにとっては自ら破滅の道を選ぶのと等しいのだ。

「あなた達と過ごした時間、私はすごく楽しかったわ!!」

永琳が、スペースシャトルから叫んだ。
今の科学力を以てすれば、シャトルに窓を付ける程度は造作もないのだ。

こちらからも大声で、思うことを叫ぶ。

「僕達もだよ！．．．．． 永琳、きっとまたいつか逢えるよ！
」

「永琳．．．．． 有難う御座いました、私達は貴女を忘れません！
」

「姉様．．．．． どうか元気で．．．．．」

僕の上にルヴィ、永夜が続けた。

ルヴィとはずっと一緒だったが、ここまで．．．．． 悲しげな笑顔は初めて見る。

そして永夜は．．．．． 泣いていた。分かっていた事でも、やはり大切な人と別れるのはとても辛いなのだ。姉さんを越えてみせると、ずっとライバルとして永琳の名を掲げていた。僕達とは比べ物にならないほど辛いだろう。

「永夜！ 今回であなたは私を越えたのよ．．．．． 泣くな！
」

「！．．．．． 姉さん．．．．． はい．．．．．！
」

．．．．．永夜にとって、これ以上無く嬉しい一言だろう。
幼い時から、全てにおいて自分の上に行く永琳の背中を追い掛けて
いたという。裏を返せばそれだけ永琳を姉として尊敬していたのだ。
その永琳に「私を越えた」と、つまり一人の科学者として、対等な
存在として認められたのである。

シャトルのエンジンが掛かり、轟音に掻き消され、声は通じなくな
った。

永琳は微笑んで、窓を閉じた

窓にカーテンを掛け、広々とした通路を戻って行く。

このシャトルは中の空間が見た目より広い。言わずもがな永夜の能力だ。

「良いのか？ おそらくもう二度と逢えんのだぞ」

「月夜見様．．．．．いつからこちらに？」

月夜見様．．．．．幼くして『月の都』のリーダーになる方だ。私よりも年下であり私が少し前から相談役を務めているのだが、知性は多少劣るものの、力とカリスマ性に関しては恐らくレフィルよりも上である。

「ついさっきだ．．．．．あの二人、ただの仙人では無いのだから？」

「やはり気付いておられましたか。妖怪でしょう。
ティルヴィングは魔剣の憑喪神で間違いありませんが．．．．．」

「我も、レフィルカと言うあの存在は到底理解できんだ。
当然手掛かりはあるが、これだけでは何とも言えん」

月夜見様はそう言いながら、懷から一枚の紙切れを取り出した。

「レフィルカ・アマキール．．．．． Refiluca Amacherだ。」

Refilucaのaを取って並び替えると．．．．．」

「Lucifer Chimaira（ルシフェル・キマイラ）．．．．．？」

「その通り、悪魔王と混合生物の名だ。当然未来の．．．．．な」

『未来の』．．．．．。

月夜見様の『全てを見通す程度の能力』は、未来予知をも可能にする。

ただし能力発動の媒体になるのは右眼のみであり、脳への負担は大きい。

この能力を発動した際には、月夜見様の漆黒の右眼が蒼く染まる。

「あまりその能力は使われない方が宜しいのでは？」

「ほんの少し先の事だ、この程度で負担は掛からん。

．．．．． 本当の『負担』とは、この能力の反動の様な事言うのだ．．．．．」

黒かった月夜見様の左目が、真紅に染まった。
背筋が凍り冷や汗が止まらなくなる感覚・・・・・・・・

『夜を創造する程度の能力』

「・・・・・・・・その比較対照になる能力なんて、まず存在しませんよ」

「どうだかな・・・・・・・・『調和と混沌を操る程度の能力』には崩されるかも知れん」

「まさか。まあ有り得ないと言い切るのは愚かですが」

調和と混沌を操る．．．．．つまり世界の概念そのものを操る能力だ。

『空間を操る程度の能力』がそうだと勘違いされがちだが、宇宙空間が膨張し続けている様に、これは世界全体の現象として有り得る能力だ。

『破滅へ導く程度の能力』も、レフィルカや月夜見様程の力があれば破れる。

この系統の能力は、同じ程の力を持たない者に対して強大過ぎる。霊力・身体能力・武術・戦術では、私の方が月夜見様よりも遙か上である。

しかし、私と月夜見様が戦えば、善戦は出来ても勝てはしないだろう。

．．．．．それだけ反則的な能力なのだ。

「その通り、有り得ん話では無い。まずレフィルカは本気を出していない。
それにあの様子だと、我と同じく完全には扱いこなせてはいないの
だろう」

「．．．．．私も、仮にも天才と呼ばれていますが、そこまでは理解できません」

終焉と同義である月夜見様の『夜』を崩すなんて、私には想像も出
来ない。

私は二人が戦う可能性の低さも考え、その事は気にしない事にした

06：月へ去りし文明（後書き）

流華「僕一言しか喋ってない」

天射「私もです」

水霧「私は悪くない。そういう回だったんだよ」

流華「ていうか、何で偽名で表記されてるの？」

天射「ずっと使っていたなら話は別ですが、一瞬しか使っていないですし」

水霧「レフィとかルヴィで表記すると括弧がずれて読みにくいから」

流華「ああそう……」

天射「で、永夜と私達、そしてあの兄妹はこれからどうなるのですか？」

水霧「それはここでは言えない。大人の都合ってやつ」

流華「私の予想では、妖怪との戦いが一回はある」

天射「でも変な話、私達が負ける気がしませんよ」

水霧「その下らねえ幻想を打ち壊す」

流華「幻想と現実を調和させたら壊せないね」

天射「……まず、貴方は男と女どちらなんですか？」

水霧「何か作ってコミケ辺りにサークル参加したりしたら分かるよ」

流華「僕の予想だとボーイッシュな女」

天射「私の予想だと女々しい感じの男です」

永夜「私の予想では顔が土砂崩れした男ね」

流華・天射・水霧「うわぁ!？」

永夜「さっきから聞いてたよ、気付かなかったの？」

流華「実を言うと気付いてた」

天射「私も誰かが居るとは思っていました」

水霧「私？いや当然気付いてたよ？」

永夜「嘘ね」

流華「嘘だね」

天射「嘘ですね」

月夜見「嘘だ」

全員「うわぁっ!？」

月夜見「我は今シャトルから飛んできた。すぐ帰らねばいかん。さ
らばだ」

全員「えー……………」

水霧「感想等よろしくお願いします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6799v/>

東方和想白魔

2011年11月6日10時04分発行